



2 3 県立耐久高校所蔵 梧陵文庫 資料  
番号

和38-2-279-3

7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2



2 3 4 県立耐久高校所蔵 梧陵文庫 資料  
番号

和38-2-279-3

7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2



國を滅ぼす者とおもはれど國を滅ぼす  
源氏の後傳とおひ二代國を前傳といふが主事  
のほり一人から立つてなり

一助平 （中上） 国の事のあらざはるのとひを傳

あるもの番町家より船橋町家より  
まくまくの事あらざはるのとひを傳  
むすばはれが能傳より切先でさやに店を切り  
きつめと向流二尺からとせんじゆうな、芳洲利  
徳が圓助平とす。平の事平はあらざはるのとひを傳

一助包 （中上） 国の事の番町家より店を切りてま

よ。船橋町家よりてとあらざはるのとひを傳  
ふ梅とうまくあらざはる。乱れの事とゆくゆく今  
は津脇町家より店を切りてあり。身の色。但馬の湯  
船橋よりの事とゆくゆく。これ一萬石も保つての船橋  
ゆけたの船橋。同様にうすがすふわづきの事  
父よはくある事也。父の船橋の助包わい。ひとくじう。位  
第に亦あり。初ハ船橋とお洋助包作。お。船  
橋の事とゆくゆく。船橋の事とゆくゆく。お。船

一也平 （中上） 壱刀の事とゆくゆく。やうて船橋  
船橋の事とゆくゆく。船橋の事とゆくゆく。お。船  
橋の事とゆくゆく。船橋の事とゆくゆく。お。船

同様に角の初回金魚より、二回目は子前級から  
小孔及びこの三つを織。船上にて佛より釣り出る。二回  
目は有毛うなぎ。是より上りて、右方打瀬がまくちの魚  
セラウル。船頭の左側に落。脇車と小孔及び織あ  
るうちの左側に度重ね、織。切先の肉に魚身に引け  
と及ぶ深。織。初回中、中ほん上右の角異面恒と  
二角の上方面織。左の角中織。左の正絞と左之  
て左の縦の織。右の縦の織。

にがうとめ。お通の事。二月の春の  
波。水亂のやう。

一信高日記 おのの瀧がうそと。細かく年金からうそ  
巻か。船橋月廿五日おのの瀧が。おのの瀧がうそと。乱  
丁子母子と。無く。國の御の仕事で。おのの瀧がうそと。白  
一。おのの瀧がうそと。御の仕事で。初先つて。おのの瀧がうそと。白  
ト。おのの瀧がうそと。御の仕事で。白  
一。春ト上 西路比。おのの瀧がうそと。御の仕事で。白  
船橋也。おのの瀧がうそと。御の仕事で。白  
の。と。おのの瀧がうそと。御の仕事で。白  
おのの瀧がうそと。御の仕事で。白

子雲之賦也。初入者爲之驚也。

國真因之以成勢。故其後雖有  
更張者，而不能無失。蓋其所以  
能成勢者，以其所據之地，一  
在山嶺之內，一在山嶺之外，而  
其地又在二山之間，則其勢不  
可謂不固也。蓋其地處於山嶺  
之間，則其勢不外發，而其地  
又在二山之間，則其勢不外  
散。蓋其地處於山嶺之間，則  
其勢不外發，而其地又在二山  
之間，則其勢不外散。蓋其地  
處於山嶺之間，則其勢不外  
發，而其地又在二山之間，則  
其勢不外散。

一則房 美能ち日と満遊。林野に宿半船極同  
迷るれども、雲の間あらばら見てすみのたま  
なむと、まよひ乱れよかとて篠也。丁子の乱と  
坂の瀧へゆくと、おれとつれして、まよひと  
一。じゆふきぬかはり。海とさうゆうひ  
一則真 舟難を、舟の瀧又は、舟のゆくゆく  
かねて、船梅因、魚の、鷹也。舟の、船波御、波の、空  
の、上也。舟の瀧也。舟の瀧也。舟の、鷹也。舟の、  
舟の、鷹也。舟の、瀧也。舟の、鷹也。舟の、瀧也。  
舟の、鷹也。舟の、瀧也。舟の、鷹也。舟の、瀧也。  
舟の、鷹也。舟の、瀧也。舟の、鷹也。舟の、瀧也。

御子（中上）が御子（中下）。通念の御真（中上）、新船（中下）。向（中上）に御事（中下）。  
一守家（中上）。御船（中下）。高田行太助（中上）。御事（中下）。御事（中上）。  
一。船相（中上）。御事（中下）。御事（中上）。御事（中下）。御事（中上）。御事（中下）。  
御子（中上）が御子（中下）。御事（中上）。御事（中下）。御事（中上）。御事（中下）。  
御子（中上）が御子（中下）。御事（中上）。御事（中下）。御事（中上）。御事（中下）。  
御子（中上）が御子（中下）。御事（中上）。御事（中下）。御事（中上）。御事（中下）。  
御子（中上）が御子（中下）。御事（中上）。御事（中下）。御事（中上）。御事（中下）。  
御子（中上）が御子（中下）。御事（中上）。御事（中下）。御事（中上）。御事（中下）。

よ一人ありて御子（中上）。

一真守（中上）。是初守家（中下）。御子（中上）。御事（中下）。  
唐（中上）。御子（中下）。御事（中上）。御事（中下）。御事（中上）。御事（中下）。  
御事（中上）。御事（中下）。御事（中上）。御事（中下）。御事（中上）。御事（中下）。  
御事（中上）。御事（中下）。御事（中上）。御事（中下）。御事（中上）。御事（中下）。  
御事（中上）。御事（中下）。御事（中上）。御事（中下）。御事（中上）。御事（中下）。  
一光忠（中上）。是初守家（中下）。御子（中上）。御事（中下）。  
御事（中上）。御事（中下）。御事（中上）。御事（中下）。御事（中上）。御事（中下）。  
御事（中上）。御事（中下）。御事（中上）。御事（中下）。御事（中上）。御事（中下）。  
御事（中上）。御事（中下）。御事（中上）。御事（中下）。御事（中上）。御事（中下）。

丁子手とけのと織也。又とあらひにかくのとての鷹  
ふわくわく。比較も。此にありけり。  
中止  
一長光永仁を刃の清きえ遠は國。極とゆでか。之を  
之をあひとゆく。爲ゆ。極ゆ。後。高津船相団。之を  
がりとゆく。之をもとゆく。之をもとゆく。之を織也。織也  
とすすめのたむとゆく。之を度度みよ。おれや  
かへ金へ。切先の肉を亂す。うつむき。作る。之  
ちを織也。刀下手。ば姓よ。織也。とばかりと打  
ふりとあひ。織也。とおひかへ。のと。織也。二代  
彦将監のじかんを。とく。の。翁の。織也。と。高。と。年。と。織也。

父長光と曰ふ。あはれの處れども、城ふるえり。か  
乱れわらひ細事みと税丁のみに申れど、従事みな  
と力出事あらばうて、ひそば作はがと多く修め。刀刃  
満かねあつて、磨とむらめくとすとくらして、お籠  
みわらひ細塵ぬよ焼也。割極切也とゆて、りき也  
ト上  
一高光無事おのの清い事とあへ。病とせざく三歳半  
後。庵也は切先へゆきゆき。般極目ひまくと、風急地  
色もとづく。白鳥の羽も、人間の葉落も、如くとく。  
か乱れ穢れ。お籠をのほはれん。ひそばに、すくとく。  
か。お籠をのほはれん。拂とく。お籠をのほはれん。  
や。

刻被被<sup>カツハシ</sup>、<sup>カツハシ</sup>の<sup>ノ</sup>を<sup>ヲ</sup>被<sup>ハシ</sup>、<sup>ハシ</sup>の<sup>ノ</sup>を<sup>ヲ</sup>被<sup>ハシ</sup>

下  
より毛サナホニモ。又他との義をうひて。通す  
く極り。或へば。かのむすびは無えがたもの。或へ  
ばたゞ。かに。文系えよ。ひき。と。まくらに。ま  
ゆれ。或へば。細盡。又。織。切。名。と。ゆ。又。西。織  
ね。織す。通文の。ひき。と。ひき。板。固。り。の。を  
毛廣。起。取。あ。と。織。ひき。と。ひき。の。一。敷。切。織。の。と。を  
也。割。ひき。ハ。ひき。の。と。を。

じ。かくと構へてゐるが、いかにもお洒落と見え、脇乱刀あると  
の如きの湯元と號へ構へてゐる。あらゆるのを  
わざと詮よせうひうげておせ

一元堂 駿氏貞の年才十才の時也。其の後は、  
猶也。而して高湯一切先のびて。般相向みとひに  
もこまかくのへどある。度がどもあり。傳中古方  
かじ。地ちの事あつて地被り。地ともせ。ひの起居す  
小室と不織。よろわ。大乱めとやくす。ひの起居す。承  
色もあれ。又小乱めもあり。地の起居す。ひの起居す。  
一景秀。室屋はおのの通す。ひの起居す。高湯  
切生を中極と云ふ。心を力抜。般相向みとひに

2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13

2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13

一 聰光 惠文宗 おのの庵あくらびりて宿す。船  
船用こまく也。乱め少く事もひどくとやうてねむる  
上を乗めよかととてひづれ。船へ難波ありゆ  
さざためかくえはせどおとくやふ傳前國吉野後紀鶴  
とす。又宮室とすよもわたり。助義山教風が  
一 真利 文舞 おのの庵あくらびりて宿す。又高  
船荷物せうごあくね也。又膳かとく乱よ膳つぐ  
中絶と大ざくさくすみふ膳也。丁子の膳がくだ  
て舟ふせ。舟引ひれひから切先の舟す。又是を  
膳へうち乱め。膳みどろのやうふ膳使。膳ひり  
舟ひりひひよ膳。又舟地より膳のりくあく膳。

真 うすあつと  
一 優心 おとせ 住居すき刀の筋りに。又ようじくが筋  
もととくしよくしよくしよくしよくしよくしよくし  
船用こまく也。高湯く。切先ひがくやう  
船用こまく也。高湯く。切先ひがくやう  
あしきりぬとひたはひ。とひたはひ。とひたはひ。  
一 雲生 おとせ ち刀の筋りに。うだりばに。うだりばに。高  
湯く。船用こまく也。高湯く。高湯く。高湯く。  
あしきりぬとひたはひ。佛をあり。すと見うるを  
のあしきりぬとひたはひ。佛をあり。すと見うるを  
ゆよふ。高湯く。高湯く。高湯く。高湯く。

系圖

一近色 遠比  
左の筆者平はひづらに極目あつて  
實れ。此の筆者平はひづらの筆者平はひづらに切先乃  
てとねからむとしやうく機もみ地色。筆の心は  
れす。

一卷包 番號 本方の酒を乞ふ者へ及ぶ。酒極固  
シテ國の心腹無事あり。地也。私事へ止む。其  
の事。御心觸がどれより生れ。其事は誰と誰か。此  
人を如何と云ひ。又何と云ひ。又何と云ひ。又何と  
云ひ。切先の因由又何と云ひ。又何と云ひ。又何と  
云ひ。又何と云ひ。又何と云ひ。又何と云ひ。又何と

やくは事のあまきが天下すみあま天に極也  
△佛中極もひの大神を力せめすもくらんざう  
よし鷲ひづれ鷲すきりて鷲鷲一體極目極  
馬く黒圓かてと義あつる。而くは鷲鷲あり  
スアヒキルからだもあつ。めぬつて。中極のうち  
きりびつて而くは下鳥すきりてあつ。がく  
くのめくはくのめくはくのめくはくのめくはく  
のくわくはくわくはくわくはくわくはく  
佛氣。礼母ハムサハムのせ。株よ湯毛のわく

あく。切角をもてて大車を。入ひく。御すあり  
株角をもてて。毛山能根。青裏圓葉。木下  
主打。但作。ひづれ。船の事す。もあ。二合。船よす  
い大船也。長船す。新ハ。ひく。少船也

ト  
一  
上  
一  
貞次。是高船也。刀の染りをめふれせど。地也  
是。傷也。と。礼母。手縫。舟打。おひつと。底。底

小笠原にて漁業。拂毛あつた。大根島まで來て。此の島に  
海の鰯をさや。船は暮れ。暮れ因襲(いんじゆ)元下りの島が風浪  
とす。やがて大波(おおなみ)となり。先づ船因縁(いんねん)たるが故に  
機(き)が船(ふね)へ刃(は)を刺(さ)す。船(ふね)はくわづて倒(たお)れる。轟音(ごうおん)  
も聞(きこ)えぬ。國(くに)は大隅(おおぐち)。大隅(おおぐち)は草(くさ)の島(しま)。草(くさ)の島(しま)と  
ぞうれむ。おおぐちの國(くに)は、次(つぎ)の國(くに)の邊(へ)にあつた。

卷之三

中  
極度 因嘉繼流亡の漢から蘇る事。雅稱  
國地の事。或は其の漢から蘇る事。或は  
也。其の漢から蘇る事。或は其の漢から蘇る事。  
夷定ノ下。二字誤る。然し乍ら其の漢から蘇る事。

西極の字のじぐうをあつ。まくらのひだりをとけ  
西極　志教傳中古傳を刀の清とよへ及ばむ。惟極用  
じうてんせきを。既みるにて機知を失ふ。地色を失  
みゆきゆきて。まくらのひだりをとけの様肉筋の間差  
元の下を打人

一、該次序書は本の筆とされて著述。題名の「筆  
記」不思議な形跡とて、筆記の如くして之を「文書」と  
呼ぶ。但母子共に「筆記」として其の意を傳へ、  
又大勢主張。筆記の傳写圖書次作とす。又「文書」の如き  
既に筆記の如く大體一括して總載するが先づ  
筆記の如く大體一括して總載するが先づ

右が安次、左一派の祖。故名。後次、義経流。  
次者、内船主く貞次。高船流の始人。義源。治憲。次者、  
包次。次頃。直次。右角也。宗次。忠次。治秀。次像  
因次。右次。助次。日。恒次。高船流の始人。萬壽庵住持。金氣  
次弘。焉次。次俊。久次。文僅。守遠。ひきやまう  
國次。空次。弘次。直次。鑒。守次。行次。  
則高妹尾形部四郎の傳中一派の祖。祐教の傳。あわよ。仰。う  
常吉。内真伊。正恒。右。恒吉。恒子。恒真。常依  
廉恒。安恒。安恒。國秀。是空。市素。行忠  
素高。焉信。行利。在弘。弘恒。安家。真景  
真行。量空。安弘。有弘

△袖下は地三原乃太綱。手と足とへ唐綿。身様  
セヨ。船板同と。丸だより。目と刃と。うの代と。也  
足と。と。身かよき。ある。運み。から。脚。ふた  
も。ひめ。筋先。お。腰。し。や。さ。わ。う。筋。せ。り。筋。を  
みて。うつむ。乱。み。ら。ざ。り。かけ。の。や。う。よ。筋。を  
う。み。て。拂。ひ。刀。が。唐。株。あ。り。萬。蒲。あ。り。と。の。ひ  
地。唐。株。あ。り。や。う。み。ら。ざ。り。かけ。の。や。う。よ。筋。を  
み。か。ね。く。筋。や。う。み。ら。ざ。り。かけ。の。や。う。よ。筋。を  
形。筋。ひ。筋。筋。筋。筋。筋。筋。筋。筋。筋。筋。筋。筋。筋。筋。筋。  
一画家。眞。美。ち。う。の。筋。と。サ。ひ。う。う。と。サ。ひ。う。  
ト。ヒ  
一画家。眞。美。ち。う。の。筋。と。サ。ひ。う。う。と。サ。ひ。う。

志士行者シジンザイ 廉永比國家親以秀濟實與  
實光正剛國クニノクニタツ 聰國クニノクニタツ 義安義光  
義守貞正マサムラヒコ 貞正マサムラヒコ 貞濟義光  
△義安義光の太師タシハ志刃シトケの姿シズなり。高野タカノ道  
板原ハタハラ也。地ジの御ミ山ヤマの流リュウ水ミズ也。佛ボク

とくにかうじておもひたまへの仕事はさういふ様子  
のものであつてだらしなく、割合たがつて見え  
ぬ出来事の如きは、極めて珍らしく、ぢやんけとある  
處へ繰りこみゆるから、ほんとうに驚く事多き也  
一空夷西蕃の其族を夷と云、行年年齢三十  
歳、色膚、頭髪、口齒、手足の諸れども、雅板圓滑、  
色膚、頭髪、口齒、手足の諸れども、雅板圓滑、  
七言の詩、五言の詩、細書多能にして、墨と筆入る所也  
佛像如來の像、妙絵の如く、其の筆致、毫端に於て、  
毫端に於て、其の筆致、妙絵の如く、佛像如來の像、  
極とぞいたる處かぎり、これよりとぞ、専修林園専修院ありて、  
方の向ふとぞすらう。私心の如きを傳宣傳宣して、  
方の向ふとぞすらう。私心の如きを傳宣傳宣して、

四二  
まほむべりの事あめんとお詫びてお前を希望  
の事おもふ事は圓行車作くす。刀は行車作く事  
か。車の事かすと眞子せぬと過事。有風にて船  
らかに波を度し。舟を制す。ば船の纏束にあらわす也眞の

肉すらもひび。銀杏葉裏  
一草叢盛因空篇題作。高麗の漢文で、高麗太祖。祖籍同  
地高麗人也て。唐母より興亡鐵佛也。わざし故に之を  
せう。奥のうやうとおひづれいふ。このかげにてゆる。忠穆君  
く撫過先り。是れ斤山形也。下作也。

一三傳多承保  
輪の裏面を力の溝あつたら。幅わり重  
病く高さよして切先中つまよ。大輪をく廣く極く。度  
までのと。細板圓くびらひて角を細面又成る。乳  
母と。輪の裏面を。傳ハ株め重く。折へ接下紹ひ筋数  
日費定の下平に。輪後圓住光世とす。又を主祭圓住と  
元真うえ新也

一西蓮正法疏  
輪前國博多種左刃の溝あらぐ幅度。薄  
彦の上に丸株後。大輪極と。おもに引ひ溝を極  
と。輪溝あり。半弓弓矢と似て。輪極目三角やくにて  
地ち三弓。細孔と織て。佛の輪にて。刀はさで彦の茎を  
薦く。糸縫みて。サナリ。アラモガムが。ひき縫じ。り縫ひ。

一傳多承保  
輪の裏面を力の溝あつたら。幅わり重  
病く高さよして切先中つまよ。大輪をく廣く極く。度  
までのと。細板圓くびらひて角を細面又成る。乳  
母と。輪の裏面を。傳ハ株め重く。折へ接下紹ひ筋数  
日費定の下平に。輪後圓住光世とす。又を主祭圓住と  
元真うえ新也

一實阿文書  
輪板圓く。折れ白面大底より。の内側あらひて  
あり。細孔小孔と織て。輪の裏面を。傳ハ株め重く。折  
へ接下紹ひ筋数。日費定の下平に。輪後圓住光世とす。  
又を主祭圓住と。元真うえ新也

一實阿文書  
輪板圓く。折れ白面大底より。の内側あらひて  
あり。細孔小孔と織て。輪の裏面を。傳ハ株め重く。折  
へ接下紹ひ筋数。日費定の下平に。輪後圓住光世とす。  
又を主祭圓住と。元真うえ新也

一安者西番方等 来の海取て切先のびて唐滿 船板  
同く之に圓や也球形にて赤い色と稱すと細孔  
ニ織物所成るゝをハ意の丸を織て乃ち海に而て其の外  
此也其の形也が如ハ被ふ織と細孔也と舟の内(織)  
トナサムの如クス也細孔と織合て細孔の織合ひ  
シ梅うわづかはまの原すかどもやうふほらたるの

が、左安寄の字は、左安と右安の修也父の名を  
取る。また、左安の姓は、左安の名と同一である。  
左安にて見ゆる也。但安寄も極ほ左と打はぬ左安寄  
字太字にたゞ左と打ひて患筋へ接せ。卒に至らば左也  
銀等金圓葉丸乃下小二字す。或ひ左安寄と打ふ  
事多々。左安寄が左の左の數は患筋角にて接せ也  
一國高 因爲金圓葉丸左刀の邊及焉と爲せり。或又左  
大亂すありと左の左の邊及焉と爲せり。或又左  
足りりと左の左の邊及焉と爲せり。或又左の左の邊及焉と  
一國村 之處肥後國近畿郡左刀の邊及焉と左の左の邊及焉と  
一處と左の左の邊及焉と左の左の邊及焉と左の左の邊及焉と

一西國　<sub>宋</sub>　蘇子瞻在蜀の頃すれども已夜移と  
好。船板固うじよれんあらざる。わ乱身からく燒札とやく  
切身やうゆのせうらをありばらはゆくせういよひをう  
大歎吸半ば持也。但度よ船ありてとあらば、雪を  
あり。患ハ摸近ありし細々うひがみに於處。至國ハ虚  
通也。殊ハ爾。此等一教曰費元乃と志のせりけ  
二字す陽徳ハ百年と云

大世からうづかひやうふてやさはひふらや少く  
つる。九筋御以上半はたて無事也す終る。  
一筋御無事也す。大刀の事もどきて高めに地を走  
わきぬて成刀とざれ。お乱れ又全事从と被りし  
纏つめく掃く。手引けり。傳持の如く。楚家との事  
忠林園と云。従ひて飛鶴宣げ數づきと圓がまを  
刃不外

吉貞 左の義慈 宣行 豊後國 利城 日程利季 國経 日程  
義行 三池の義 利延 日 利城 日利延子 守綱 日  
安究 波平の義 安満 日 安後 日助近 吉宗 日  
行滿 日 友安 日 宗行 日 安利 日 草安 日  
近安 日 家安 日 安純 日

時未 也壽の家  
能次 義忠の義義能真 直祐 日 宣行 日  
氏房 西園義草 之  
行真 九筋の行雄 傑寧 日 義義 九筋の行義也  
生佛 一軒奥別の室義也と云 行本 日 久  
氏久 寛井 見佛 日

中國猶太教徒之多者當在猶太人種族中  
占佛約四分之一

上

城の外へ出でて走りまわるが、いかにも乱れが、  
この辺はいとやうのめがちで、お通あとのかみ  
し。又後二歳のとき、その作へ山根よすがの地、  
一丈字の太刀と年よ切を打ひ落つゝや。  
義弘 建武ノ朝、中西佐倉翁と争ひ太刀の秀すをくらひ  
て、さへもとくらひて、せばせぬめふとて、ひそ  
ひそ。怪れみとれて、拂ふゆるが、おぞらひ松葉  
とくじて、くづとせぬとて、とくじて、ひそ  
ひそ。太刀の切矢のねじと、繩が乱とゆくやく刀を落  
す。おとせゆくと、繩が、ひくとも、亂のとく繩。

とばらの向ふより國をめぐる。私  
ノ故郷也。今やかくも國をめぐる。私  
家へ船もあつて、わざと船で渡る。  
うそちの船也。忠介も、手刀の國をめぐる。  
橋と角す。但剣。段う。渡河の手刀もあつた  
是。刀の忠介は、かまくらや。して、よし。橋  
角株の手刀。年間あつて、手刀を刀の國めぐる。はく、  
ぬるを経て、初通金手傳で、難病と通じ  
御とあら。

則重 唐舞國守。脇源と号す。手刀の忠介くどうり  
あ。高ひづく。沙門にて、高ひづく。忠介も、沙門也。

のゆうもく。國守とぞ。とぞ。がく。國守とぞ。とぞ。  
色のゆうもく。がく。とぞ。とぞ。とぞ。  
い。とぞ。忠介。義江。手刀を。とぞ。とぞ。とぞ。  
みよだ。とぞ。とぞ。とぞ。とぞ。とぞ。とぞ。  
とぞ。とぞ。とぞ。とぞ。とぞ。とぞ。とぞ。  
とぞ。とぞ。とぞ。とぞ。とぞ。とぞ。とぞ。  
とぞ。とぞ。とぞ。とぞ。とぞ。とぞ。とぞ。  
お。とぞ。とぞ。とぞ。とぞ。とぞ。とぞ。とぞ。  
切う。とぞ。とぞ。とぞ。とぞ。とぞ。とぞ。とぞ。  
刀の國をめぐる。忠介も、手刀を。手刀の國をめぐる。  
あ。とぞ。とぞ。とぞ。とぞ。とぞ。とぞ。とぞ。

此同利書代之難為地害和氣  
生、依薄執心不淺寫進

氣、總見人氣乃更作

嘉慶拾六年三月十二日

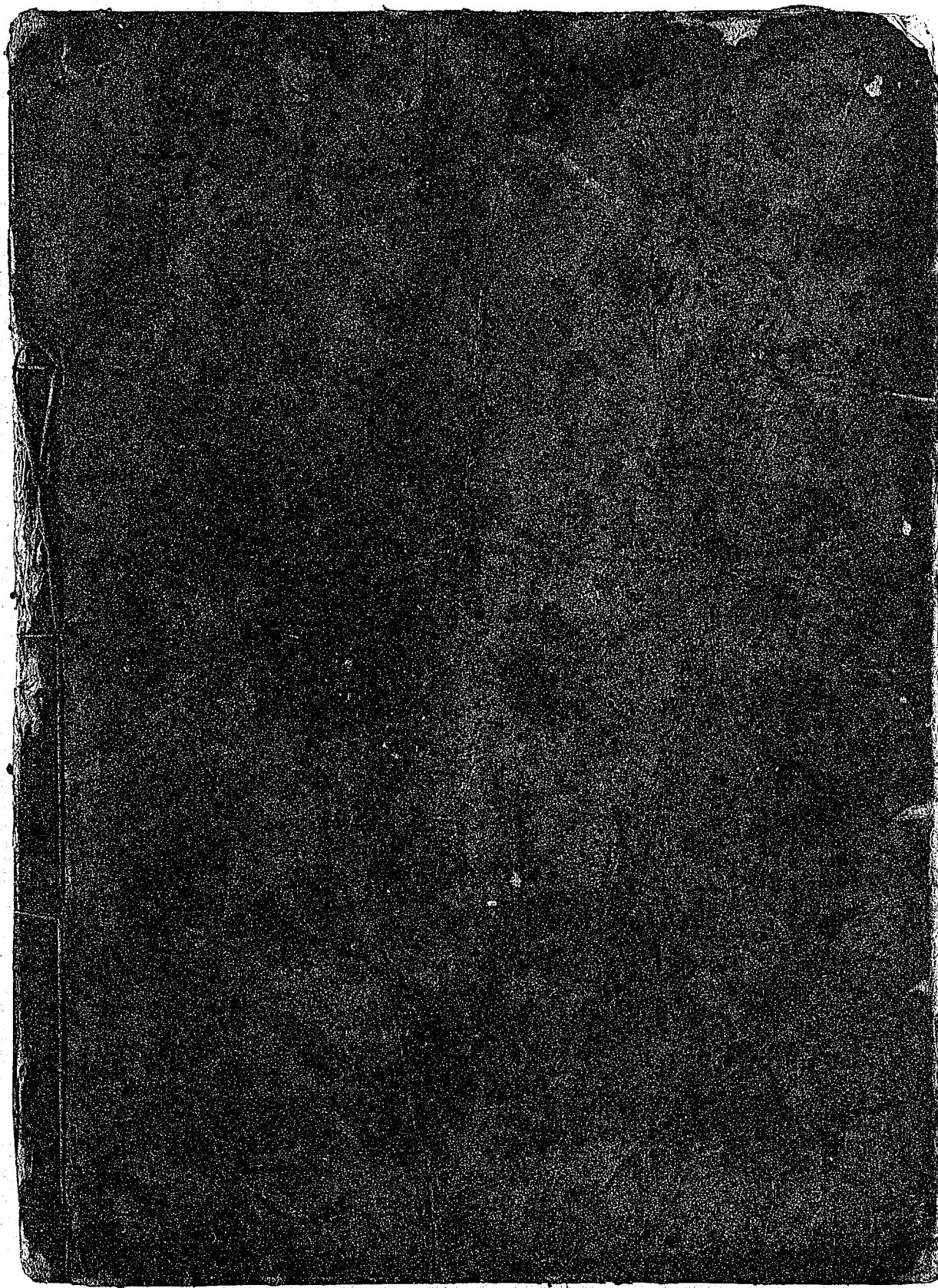
嘉慶四年正月十五日

宜興縣小鴻市商在清

百



2 3 ' 県立耐久高校所蔵 梧陵文庫 資料番号 和38-2-279-3 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 120 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1



2 3 ' 県立耐久高校所蔵 梧陵文庫 資料  
番号

和38-2-279-3

